



KNIT #3

JIA城北地域会からの地域紹介と活動報告

JIA城北地域会からの地域紹介と活動報告

KNIT #3

特集：使い続ける工夫、住み続ける価値

- P3-P5 同潤会江古田分譲住宅の記憶 佐々木邸保存会代表／能登路 雅子
- P6 旧万世橋駅の再生 信原 利行
- P7 自由学園「明日館」—その幼児体験が建築の道へ— 柴田 知彦
- P8 パンドラの匣—旧日本陸軍が残したもの— 鈴木 和貴
- P9 枝垂梅の咲く頃—今に伝える農の景— 鈴木 和貴
- P10-P11 「街のリノベーション木密と保存」 亀井 天元
- P12-P14 近江三都物語 柴田 いづみ
- P14-P15 目白の森公園 —静かな活動が生んだ地域資産— 柴田 知彦
- P16-P20 KNIT 城北4区レポート 野口 真次／要 久美子／信原 利行／秋山 信行
- 編集後記 鈴木 和貴



特集



使い続ける工夫、住み続ける価値

我々が何を大切に思い、何を次世代に繋いでいくのか、
また、将来の魅力ある姿は何かを考えます。



使い続ける工夫、住み続ける価値

子供の頃、よく言われたコトバは「モノを大切に下さい」でした。高度経済成長期に生まれ「消費は美德」とされた時代、戦後の混乱期を終え大量消費が社会を活性化させ日本を豊かにすると信じていた時代でしたが、それでも「モノを大切に下さい」と大人からよく言われました。しかし、子供心には新しいモノの輝きは魅力的で、そのコトバが道徳としての教えにしか聞こえませんでした。今にして思えば、そう言う彼らは、戦争で国土の大半を灰燼に帰し、失ったモノの嘆きを忘れるかのような消費行動に、懐疑心を持って接していたからではないかと想像しています。

それから半世紀以上が経過した今、かつてのような拡張型の成長に期待できない中で「お金では買えないモノ」があることに、市民は気づき始めたように思います。合理性や有効利用などを大義として、その更新を推進してみたものの、その結果として得られたものが機能的であるとか、効率的とか称されても何か腑に落ちないものを経験されていると思います。それは、それまでに積み上げてきた時間（換言すればそこに宿る思い出）や、その背景となる歴史や文化などが継承できなかったからではないでしょうか。久しぶりに訪ねた街の変貌に落胆し、よそ行き顔の街並には帰省の念ではなく訪問者として襟を正してしまう、居心地の悪さすら覚えるかもしれません。

とはいえ、まちが博物館の静態保存であるはずもなく、都市部への人口の集中や少子高齢化社会という居住環境や社会環境の変化に対しての新しいライフスタイルを市民は常に模索しているのですから、そこへの提案は将来の魅力ある街の姿をイメージして行すべき、と考えます。

今回の特集は、建築や街並・景観などを通して地域を考えたとき、我々が何を大切に思い、何を次世代に繋いでいくのか、また、将来の魅力ある姿は何かを考えます。

使い続けることや住み続けることは容易なことではありません。そこには強い意志と努力がなければならず、概して個人ないし少数の方にそれが委ねられている傾向にあります。ただ、その行為は建築やまちへの愛着を生み、地域への帰属意識、文化や伝統・地域の歴史などの次世代への継承といった地域の「価値」を高めるものとなります。いわゆる「お金では買えないモノ」です。

そして、それが（日本というより）地域を豊かにするのではないかと考えますし、多くの方と共有すべき意識と考えます。

今、半世紀以上前によく言われたことは、このことを言っていたのではないとも思っています。

（鈴木 和貴）





同潤会江古田分譲住宅の記憶

佐々木邸保存会代表 能登路 雅子

2013年に同潤会による最後のアパートが解体された折、居住者の豊かな共同生活に配慮した設計のユニークさがあらためて注目を集めました。一方、同潤会が東京・横浜地域に500戸以上建設した木造一戸建て分譲住宅については、一般にはほとんど知られていません。

関東大震災後、日本初の本格的な公的住宅供給機関として1924年に創設された同潤会は、鉄筋コンクリート造りの都市型集合住宅とは別に郊外に向けた庭付き一戸建ての木造分譲住宅事業も行なって、その後の日本の中流向け住宅に大きな影響をおよぼしました。1934年10月、当時は板橋区であった小竹町に30戸の同潤会住宅が分譲され、そのひとつである佐々木邸は創建時の姿をいまでも残しています。

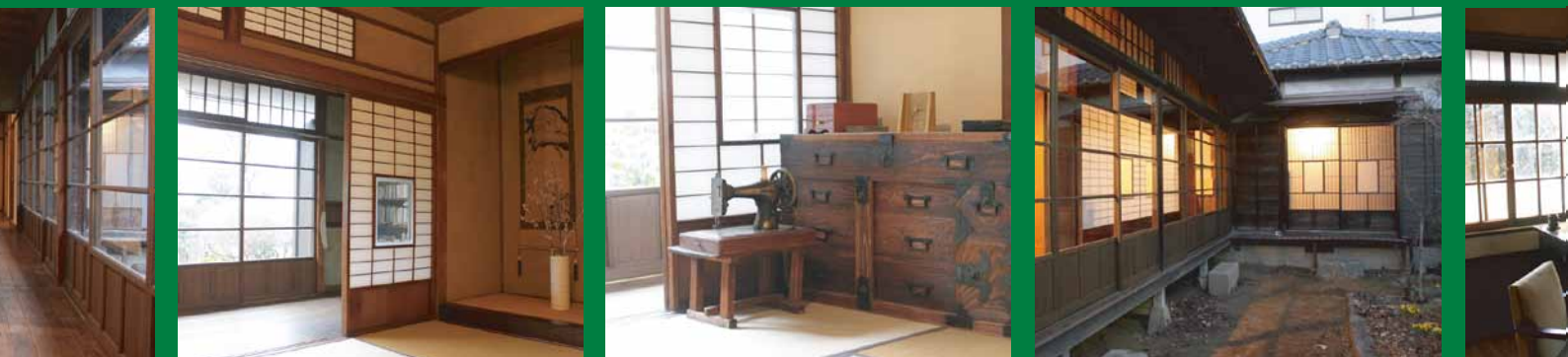
玄関横にモダンな洋間を配した間取り、中廊下型住宅形式、座敷と居間の雁行配置、南側の庭をのぞむ広縁、近代的設備を備え

た台所など、昭和初期の中産階級向け住宅の典型的事例です。家族の人数が多かったために、分譲の翌年に住居の東側に和室三室を増築しました。

佐々木邸の初代当主は私の母方の祖父で、私も2歳から8歳までをここで過ごしました。その後、色々面白い家に住みましたが、自分にとってこの家は、庭とともに懐かしい原風景で、ここでの家族との日常の暮らしが、私の基本的な価値観や感性のもととなっている気がします。

祖父が1960年代の末に亡くなり、やがて2代目の叔父も高齢化し、佐々木邸の今後について建築の専門家に視察していただいたのは2006年のことでした。築70年以上を経て、家はかなり老朽化していましたが、同潤会住宅でこれほどオリジナルの姿を保っている家はほとんどないというお話でした。祖父母の代から大切に住み続け、親族の多くが愛着を抱いてきたこの家をできれば保存しようという発想がしだいに具体的な形となって、2010年1月に文化庁により主屋部分が登録有形文化財として認定されるにいたりました。

原則非公開ではありますが、東京都、練馬区などの協力を得て



見学会を催し、近代和風建築、住宅史や景観学などに関心のある研究者や学生、一般市民の見学、メディアの取材にも対応しています。2010年にはNHKのテレビ番組『美の壺』、翌年には『新日本風土記』でも紹介されました。

今後さらに佐々木邸を研究教育、地域振興、国際文化交流などのために活用し、その長期的な保存について家族関係者、専門家、地域の方々をまじえて多角的に考えるための組織として、旧同潤会江古田分譲住宅佐々木邸保存会（略称 佐々木邸保存会）を2011年に立ち上げ、多くの方の賛同と支持を得ています。

佐々木邸の建築としての特徴については、住宅史の専門家による紹介がなされていますが、私の役割はむしろ、ここに実際に住んだ経験をもとに家族の歴史と暮らしに関する記録をまとめ、後世に伝えていくことだと思っています。

振りかえってみると、1960年代ごろまで、この家では家族一人一人の年齢やステータスによって、生活空間や居場所がはっきりしているという特徴がありました。たとえば、表玄関を使うのはお客様と祖父だけで、あとの家族は台所の勝手口や縁側から出入りをしていました。家父長である祖父が使う応接間や座敷

は私たち子どもにとっては立ち入り禁止の聖域で、いまでもこの辺りに来ると祖父の気配のようなものを肌で感じて、緊張することがあるのは不思議です。

一方で台所や茶の間は女性や子供たちの領域で、賑やかで温かさのあふれる場所でした。このように、住宅の公的な部分と私的な部分、表と裏はかなり明確に区別されていて、建材のグレードもはっきり使い分けがしてあります。

四季折々の行事もこの家の思い出とつながっています。来客の多い年末年始の賑わい、節分の豆まき、お雛様、菖蒲湯、お盆の迎え火と送り火、お月見の様子など、いまでも目に浮かびます。夏には井戸でスイカを冷やしたりして、庭の自然と溶け合った季節のリズムがある暮らしでした。また、近隣同士の謡や俳句の集いもさかんで、子どもたちも道路や庭でよく一緒に遊びました。

このようなんびりしたペースの生活は、高度成長期がすすむにつれて、しだいに姿を消していきました。世代交代とともに、分譲住宅の建替えや細分化が進み、東京オリンピックのころから周辺の風景も住民の暮らしも様変わりしたと思います。

佐々木邸保存会の活動の一環として、同潤会江古田住宅全体



の住民の相互扶助や子ども会活動といった社会的実態を明らかにしようという計画を立て、練馬まちづくりセンターの活動助成を受けて、昨年度、有志数名で調査をはじめました。この分譲住宅に70年以上住んでいる方々に聞き取りをさせていただき、昔のアルバムや地図を見ながら、幅広い体験談をうかがうことで、かつての同潤会コミュニティの様子が少しずつつかめてきています。

古老のお話や専門家の講演をお聞きする場所として、また近隣の交流の場として、佐々木邸は重要な活動拠点の役割をはたしています。前述のように、この地域は練馬区が戦後の1947年に独立するまでは板橋区にあり、また豊島区とも隣接していることから、城北地域の発展の歴史にも関わっています。その点も含め、この調査活動をやがては昭和戦前期から戦後にかけた時代の東京郊外における新しいコミュニティ形成に関する事例研究として、まとめる計画を立てています。

調査活動を担っている中心メンバーはこの分譲住宅に住み続けてきた方々ですが、目的を共有することであらためて協力しあう関係が深まっています。かつてのコミュニティの研究が新

しいコミュニティにつながっているという実感は、当初は予想もしていなかった成果でした。これからも、佐々木邸という遺構を「生きた歴史空間」として積極的に活用することをつうじて、魅力ある地域づくりのネットワークを広げていきたいと考えています。

撮影：松隈 章

同潤会江古田分譲住宅の記憶





写真2



写真6



写真3



写真4



写真5

旧万世橋駅の再生



写真1

JR中央線の神田駅と御茶ノ水駅間には、かつて万世橋駅という駅がありました。(写真1) 明治45年(1912)に中央線の終点として開業し、大正8年(1919)には中央線が東京駅まで延伸されて中間駅となり、大正12年(1923)の関東大震災で初代駅舎は消失してしましますが、大正14年(1925)には2代目駅舎が再建されています。その後、昭和10年(1935)には鉄道博物館(後の交通博物館)が併設され施設は平成18年(2006)まで存在し続けます。駅機能としては太平洋戦争中の昭和18年(1943)には休止されましたが、頑丈なレンガ造りの高架橋は鉄道線路として使い続けられています。

その旧万世橋駅と旧交通博物館のエリアが、平成25年(2013)秋に「マーチ・エキュート神田万世橋」(写真2)と言う商業施設として再整備されました。1階の高架下部分はアーチ構造をそのまま生かした物販や飲食の店舗があり、レンガアーチを補強しているので内部の天井は低い部分もあり、とても面白い形をしています。(写真3) 2階には旧万世橋駅のプラットホームを再利

用したカフェデッキが配置されています。カフェデッキのすぐ横を現在の中央線が通過するため、この部分は安全のためガラスのフレームが設けられています。(写真4) また、かつて開業時より存在する階段を「1912階段」(写真5)と名付けられて、一般動線の中に組み入れられており、施設の中に遺構として表現されています。また外観に於いてもレンガアーチをうまく補強し(写真6)外部から直接入れる店舗などを配置して生きた街並み形成に寄与しています。このように施設を時代の流れに対応させて、補強等を施し使い続けること、建造物が同じ外観を存在させることは、その建造物が街並みの中で長い年月をかけて人々の目に留まることとなります。そうすることにより、愛される街、街を誇りに思う気持ちが芽生えるものと私は考えています。(信原 利行)

自由学園「明日館」

—その幼児体験が建築の道へ—

F.L. ライトが日本に残した名作自由学園・明日館（遠藤新と共作 竣工1927年）は、今では国の重要文化財（指定1997年）となっている。2×4の先駆けとなる木造枠組壁式構法に漆喰塗りの建物は、築後70年余を経て老朽化が進んでいたが、全面的な保存修理が行われ、今日に甦っている。集会施設として一般に開放され、「動態保存」でも知られている

終戦直後昭和24～5年頃、私はこの建物で育った。幼稚園に相当する「生活団」がこの素敵な建物を使っていたからだ。戦後の焼け跡が広がり、もののない中、この建物での生活は、印象的だった。生活団では、何もかもを自分達で行う教育方針が貫かれていた。例えば、食事を作る役、配膳する役、サービスを受ける役を子供達が交互に行っていた。園庭には鶏小屋があり、その世話をした。実際には大人の支えを受けて見よう見まねだったろう。けれど、記憶の中では今も鮮明だ。

その食事の空間が、中央の大ホールだったのだろうか。南に大きく開いた吹き抜け空間、木立のような細かい窓割りは、幼い頃の記憶と重なり懐かしい。大谷石の回廊が囲む前庭の広がり、道を隔てた遠藤新作の講堂棟へ広がる。こちらは微妙にスケール感が大きく骨組みの木材の色が濃いためか、子供心にかめくしく感じた。

しかしながら年少の私には、この特別な空間での生活は、余りなじめなかったようだ。毎日泣いて壁を向いて一言も発しなかったと記録に残っている。その後、両親は目白に移り住み、近所の幼稚園に移った。教会堂がやけ落ちたコンクリート基礎の上を鬼ごっこして走り回る、そんな冒険ができる庶民的な生活が気に入って生活が積極的になった。おだてられてクラス全員の絵かき帳に何やら描いた逸話も残っている。自由学園を再発見したのは、大学で建築を学び始めた頃だ。夏の課題のスケッチの対象に選び、あの大谷石の腰壁に1日たたずみながら、幼児の頃の思い出と目の前の建物が少しずつ結びついてきた。古典とも言える正面生、シンメトリーの構図、高く保たれた品位と優しいスケール感・・・この親しみのある名作は、建築家としての私の原点でもある。（柴田 知彦）



自由学園明日館
この一世紀間、背景のビル群以外何も変わっていない



パンドラの匣 ー旧日本陸軍が残したものー

城北地域を東西に横断する石神井川。

かつて蛇行しながら流れていたこの川は、王子周辺で溪谷をつくり、その一帯は飛鳥山と並び称される景勝地であったことが「瀧野川」の地名からも想像される。

加賀藩前田家の下屋敷はその石神井川を邸内に引き込み築山のある回遊式庭園を有する21万余坪の広大な敷地。しかし泰平の世も終焉を迎え、幕府は火薬生産の近代化を図るため慶応元(1865)年、澤太郎左衛門をオランダに留学させる。澤は新しい技術とベルギーより購入した圧磨機圧輪とともに帰国し、新政府のもと、上地された旧加賀藩下屋敷のうち約3万坪の敷地にて陸軍の西洋式火薬製造所を建設、石神井川を動力とした有煙火薬の製造を行なった。

このことが、この地が陸軍の武器弾薬の供給地として拡大していく始まりの一つであり、北区・板橋区周辺(特に王子・十条・加賀地区、赤羽地区)は軍施設や軍関連施設が集中し、民間の関連産業施設も集中していくことになる。集中した理由は「水利があり」「交通の便が良く」「用地が確保しやすかった」等が、考えられる。

一方、地域の歴史を別の視点から見れば、集積した軍事機能の解体は光学機器・精密機器・化学・薬品・火薬などの高度な技術をもった専門家を民間に解放し、戦後の地域の基幹産業として、日本の高度成長にあわせて発展していった。

そして、かつての広大な軍用地と、残された建築物は地域の新たな役割を担い活用されている。(鈴木 和貴)

枝垂梅の咲く頃 —今に伝える農の景—

板橋区赤塚地区にお住まいのA氏(72)は、ご先祖が160年前に独立してこの地に居を構えてから6代目となる当主。

A氏にこの家、この街に伝わる大切なものについて伺った。

A家は代々農業を営み、徳丸が原(現材の高島平周辺)の田圃と赤塚地区の台地に畑を有していた。A家の地区には農家が50件ほどで、どの農家も田圃と畑を有していて、納屋があり、農耕馬を飼っていた。農耕馬は収穫した稲や麦を台地の上まで運ぶためにも必要だった。

農作業は厳しく、朝から晩まで働き通しのご両親であった。雨の日も蓑カッパを着て田圃に出られ、農地だけでなく納屋やその軒下での作業もご覧になられている。

学校から帰ってもご両親は農作業に従事されているので、友達と屋外で遊ぶ。おやつにはおにぎりを作り、また、蒸籠で蒸かしたお芋の時もあった。地飼いの鶏を捌き、ガラで採った出汁の饅頭の味は格別のものとのこと。とはいえ、主食は、収穫したお米の等級の高いものは市場へ出し、農家のご家族は麦を混ぜたご飯を食していたという。

そのような、農業を中心とした生活が大きく変わることになったのが、昭和38年から始まる高島平団地の造成である。それを機に、田圃を日本住宅公団(現・UR都市機構)に売却し、農業を諦める農家も出始める。A氏も団地の建設がなければ、「親の苦労を繰り返していた」とおっしゃっている。相続時に農地を放棄する事例も多い中、A氏は先代より農地を引き継ぎ、兼業農家を営まれている。そして、A氏の見識とお人柄から、区の農政の重責を担われているが、都市農業を続けること、さらには農の景を残していくことは、並大抵のことではないと感じた。

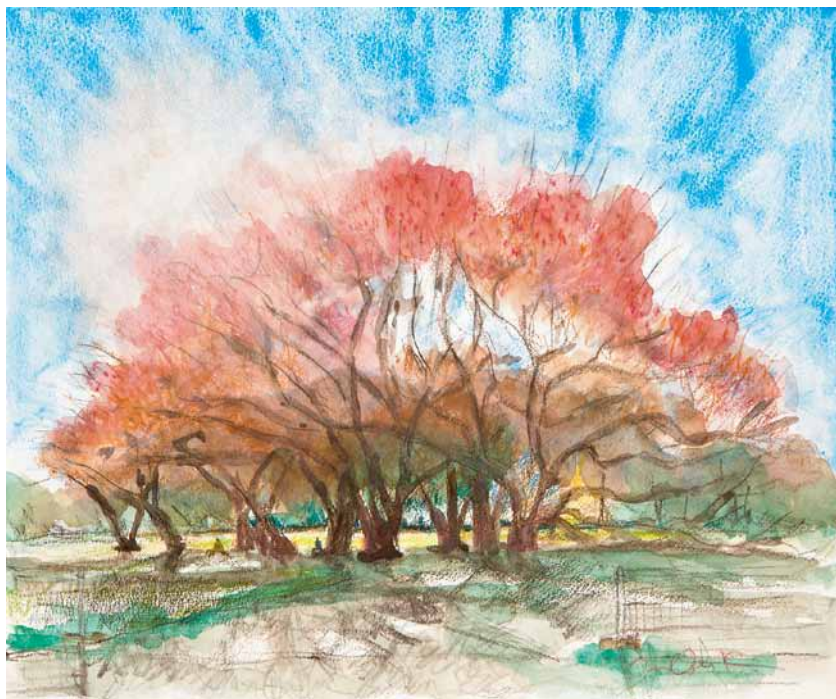
50年前、松月院の植木市でお母様を買ってこられた枝垂梅が



今年も満開の時節を迎えている。30cmほどの盆栽仕立てが、今は5mを超す樹に成長し、毎年この時節を待ち望んでいる方も多い。

大規模に区画整理を行った地区だが、前面の古道は事業対象区域から外れ、大正期の納屋も、お母様の植えられた枝垂梅も残った。この街がこの街である所以のようにも思う。(鈴木 和貴)

「街のリノベーション木密と保存」



画：亀井 天元





都ではオリンピックが開催される2020年に向けて、木密地域不燃化10年プロジェクトを進めていて、区が行う生活道路や公園の整備、建築物の共同化等の取り組みに対し、都が財政的・技術的な支援を行い、整備促進策を重点的・集中的に取り組むとしています。現在木密区部38地区(1790ha)で進んでいる不燃化特区の状況です。

準防火地域の延焼線かわしたところには、貴重な和の空間が見られますが、こうしたものも区別なく壊されてゆきます。真壁の客間の床の間、広縁のある玄関、道に開いた縁側や庭、南側廊下など、こういった空間が長き時をかけ真の自助共助などの精神を支え育ててきたのではないのでしょうか。チビまる子やサザエさんを見ているとそう思いませんか。新基準でもそれなりにいい建築は出てくるでしょう。しかしそれには再度長き時がかかります。国は不燃領域率の算定基準を耐火建築物としており、都は準耐火建築物(燃え崩れる時間で定めた準耐火構造が広域火災をいかに焼け止めるのか。それなら既存防火構造でも、中高木を植え生垣を整備するべき。)にしております。区は(木密区の財政は都と国に握られており、なかなか独自性は出せない)、言われたままにひたすら励んでいる。準耐火建築物かどうかの判定は、外から見てわかるようなものではありません。広域的な不燃領域率の数字を一体だれが作り出しているのか?この話は、地球温暖化の原因がCO2だとした論理に全く相似している。

何処への営利誘導のための強硬化ミクスなのだろうか。

都のオリンピック特定整備路線事業にまぎれ、新防火の耐火基準UP、都市計画変更による用途変更、官主導の地区計画決定など・・・、延焼遮断帯の構築であれば、路線商業までで充分。識者の間では、路線商業も、地域の街並みの劣化コピーの増幅と言われています。豊島区では、今後不燃化特区に追加する地域で隣接の雑司ヶ谷エリアが未来遺産となって喜んでいるという全くちぐはぐな状態となっています。不燃化特区内の神社仏閣は、重林寺、妙経寺、長崎神社、惣禅寺赤門、本妙寺鐘楼、今後同じ建て方は出来なくなります。他地区で、すでに商業趣味の寺?施設に生まれ変わったところもあります。このことは、準防火地域の防火構造の木造を駆逐することが、よほど慎重にしなければ文化の消滅となることへの危機感を、責任者がだれも持っていないことの証明です。

年末に、紅葉を描きに用賀の砧公園に行ってきました。約40haの敷地で、立派な桜の木があり、その秋の桜に感動し描き周囲を歩き回ってきました。本町地区の広さに匹敵します。たまにのびのびとした気持ちでこのようなところを歩くと、都市のスケール感を修正するのにもってこいの機会ともなります。そしてこのように感動するようなものがいくつかあるような都市を残したいと思います。

(亀井 天元)

近江三都物語



戦災にあわなかった近江の各都市の旧市街に立ち並ぶ町家は、なんと100年から300年の時代を経ている。木造の市街地は、レンガや石づくりの文化と変わらぬ歴史を蓄積している事実には驚かされるだろう。長く住み使い続けることの正統性は、私たちの文化にも深く根付いていると言って良い。近年まちづくりが盛んとなり、その価値が見直され、新たな投資がなされ、まち並景観の整備と共に復活してきている。そんな事例を近江の三都に求め、紹介したい。

その1. 長浜

天正元年、織田信長の浅井長政攻めで戦功のあった木下藤吉郎は、その領地を与えられて羽柴(豊臣)秀吉と名乗り、始めて城となった。城の完成後、今浜と呼ばれた土地を、信長の名前から「長浜」としたとされている。城は豊臣家が滅んだ後に取り壊され、一部は彦根城に移築された。現在の城は長浜城博物館として、昭和58(1983)年、市民の寄付で建てられている。

城下町は、秀吉が描いた町割りが今も続き、秀吉の始めての子の誕生を祝い振舞われた金によって作られた「曳山」は、国の重



(長浜) 大通寺表参道 黒壁1号館

要文化財となり、「子供歌舞伎」が今も演じられている。

黒壁の保存とその展開

明治33年に黒漆喰の第百三十銀行として建てられ、昭和27(1932)年白く塗られてキリスト教会になった。その後売却の際第三セクター株式会社黒壁が設立され、平成元(1989)年に、黒壁ガラス館として再生された。その後、北国街道、ゆう一番街の町家を次々と再生させ、黒壁系列は25店舗となり、年間180万人(平成25年)が訪れる都市となった。

大通寺参道・町家と街並み

真宗大谷派長浜別院大通寺の参道は、1960年代の賑わいが薄れた後、アーケードの汚れた街並みになってしまった。平成元(1989)年、看板建築のファサードを取り除き、昔の町家を再生した「雁木型アーケード」の手法によって参道が復活した。実にほとんどの町家が看板の後に残されていたことは幸運だった。この手法は、ゆう一番街にも活用された。



(近江八幡) 八幡堀
旧市街古地図



その2. 近江八幡

八幡堀の再生と旧市街

八幡堀は、秀吉の嫡男としての秀次が、八幡城の築城と共に造り、琵琶湖の航行についての税を取るなど物流の拠点となった。信長の没後、秀次は都市の区画を作り、安土の商人を移り住まわせて八幡の繁栄に貢献したが、秀吉に男子誕生後、謀反の罪をきせられ失脚した。その後、商人達は「為政者に頼らない」という教訓の元に生きてきた。八幡堀が悪臭を放つ水溜りになった時も、青年商工会議所の市民達が、自ら動く事で賛同者を得、国をも動かす力となった。

旧市街の八幡堀周辺、新町、永原町は、国指定重要伝統的建造物群保存地区としての整備が進んでいる。

ヴォーリーズ建築

建築家としてだけでなく、ウィリアム・メレル・ヴォーリーズはメンタム(旧メンソレータム)を作り販売する事業者として、ヴォーリーズ記念病院に至る福祉・医療者として、近江兄弟社学園に至る教育者として、また音楽家として、明治・大正・昭和、

そして戦後までの日本の近代化に大きく貢献した人物がである。その建物群は、それぞれの偉業を達成していく過程の重要な証拠でもある。NPOヴォーリーズ遺産を守る市民の会が発足し、建物や文化を守っていく。発端は、病院敷地内の最初の建物であるツッカーハウスが老朽化してその保存が急がれた事と、2009年の「ヴォーリーズ in 近江八幡展」であり、縁のある建物に展示する市内巡回型の展覧会であった。

2014年の「ヴォーリーズ・メモリアル in 近江八幡」も市内巡回型で、八幡のヴォーリーズ遺産を顕彰するものであった。

その3. 彦根

慶長5(1600)年の関ヶ原の戦い直後、石田三成の佐和山城に入った井伊直政は、戦後処理に奔走したが、2年後に亡くなり、直孝の代になり、徳川家康の指示により、彦根城が築かれた。西への備えを持った城は、長浜城、大津城などから移築され合成された城であった。三重の堀と北は松原内湖(戦争中1944年~1945年の干拓で失われた)で防備を固め、南は外堀の外に芹川を配し、間に足軽屋敷群を置き、どんつき・雁行と城下



(彦根) 夢キャッスルロード 花しょうぶ通りの三武将

を固めた。

花しょうぶ通りの明日

城の中堀の京橋から伸びる商業地は、平成の道路の拡幅と共に、夢京橋・キャッスルロードとして木造町家のファサードをもつ街路となった。これらは行政の提案を地元町衆が覆し、自ら景観コードを決めた事例となった。この平成の町家群の裏手には、少なくなったとはいえ、いまだに足軽屋敷や町人の町が残り、それらの表看板となっている。さらに、花しょうぶ通り（旧名：上恵比須商店街）は、現在もっとも彦根で元気なまちづくりをしている。LLP ひこね街の駅が2007年に発足し、第1街の駅「寺子屋力石」第2街の駅「戦国丸」第3街の駅「通信舎」、第4街の駅「治部少丸」と通りに面した江戸時代から昭和初期の町家を改修し活用している。「結のまちづくり研究所」もこの通りに面している。文化庁の重要伝統的建造物群保存地区にむけての調査が終わり、申請準備中である。

(柴田 いづみ)



目白の森公園

—静かな活動が生んだ地域資産—

住宅地の戦後風景

終戦直後この一帯は、爆撃による焼け野原でした。徳川將軍の鷹狩り場の歴史から推察して、所々の雑木林を除いて樹木は決して多くはなかったかもしれません。しかし、戦後目白の住人は、1本の苗木を植えることから始め、やがて20年で緑豊かな山の手住宅地を再現しました。この復興の歴史は重要です。

理性的な運動が望外な結果へ

そこに起こったのが、屋敷林を伐採するマンション計画でした。全てを切り倒そうとする乱暴な話が人々をつき動かし、1994年5月、「森の緑の環境を保存する会」が立ち上がりました。ここで重要なことは、“マンション計画を否定せず樹木の保全を要望する”ことでした。反対ののぼりは一切立てず、開発側の権利を認めるなかでの話し合いです。“ウグイスの鳴き声で目を覚ます森を守ろう”の呼びかけは二千を超える署名となり、請願と



古木の根による記念碑



地域文化人揮筆の嘆願書

して区に提出、幸いなことに豊島区議会で採択され、なんと公園として買収が決まったのです。

知られていませんが、事業者の“買い取りオプションの同意”は、感謝すべきこと、これなしでは買い取り自体不可能でした。また、区の起債の原資として都の「保存樹林地等公有化資金貸付制度」が、使う者なく全額利用できたことも大きかったと思います。議会・行政全員賛成の背景であり、地域にとっては、「理性的で静かな運動に対するご褒美」となりました。

目白の森へ

その後地域からの要望書で二つのコンセプトを計画に織り込みました。森を3つのゾーンで構成すること（1. 日常の通りぬけゾーン、2. 人の入らない保全ゾーン、3. 中間の回遊路）、そして公園沿道に歩道状空地を巡らせ、住宅地の質を高めることです。いずれも実現しました。1997年、オブジェ「楠古木の切り株」を地域から寄贈、区は架台を提供し、森の記念碑が協働で作成しました。

他の住宅地同様、一人一人が育み守ることで、目白の緑の資産は保たれています。長く住み、好きと言える地域への思いがその裏付けとなっています。（柴田 知彦）

フォトメッセージ272 都市に生き続ける森
 将来の子供たちのため 100年、200年先までこの森を残す
 2014/6/9 建設技術研究所 岡村幸二

2014年6月4日 千葉県松戸市幸谷

- “関さんの森” は市民の共有財産
常盤線の新松戸駅から歩いて10分ほどの丘陵地。スダンイやケヤキに囲まれた1.5haの里山林では、江戸時代から7代続く関家の屋敷林として継承され、近年の急激な都市開発をよそに、かけがえない自然を維持し続けています。
- 年間100回を超える森のイベント
“わくわく探検隊”に参加した子供たちからは、「ザクロの実、カヤの実、ケンボナンなど初めて食べたものがたくさんありました。野外での活動楽しかったです。」などの感想を寄せています。（2013年に松戸市の特別緑地保全地区に指定）

▲木漏れ日が差し込む屋敷林の広場

関さんの森
新松戸
屋敷林を地域の森公園に提供した事例

KNIT

城北4区レポート

K:北区

「まち歩き」田端駒込と文士村の記憶・城北の東・高台には文士村がありました。都内には、大田区馬込文士村、杉並阿佐ヶ谷文士村などが形成されていました。

N:練馬区

豊島園の今後・防災公園化への動きレポート・城北の遊園地「としまえん」・東京都の都市公園化構想があるという話題です。

I:板橋区

徳丸に200年使い続けられた民家の旧粕谷家住宅見学記です。(名主さんの東の隠居所)

T:豊島区

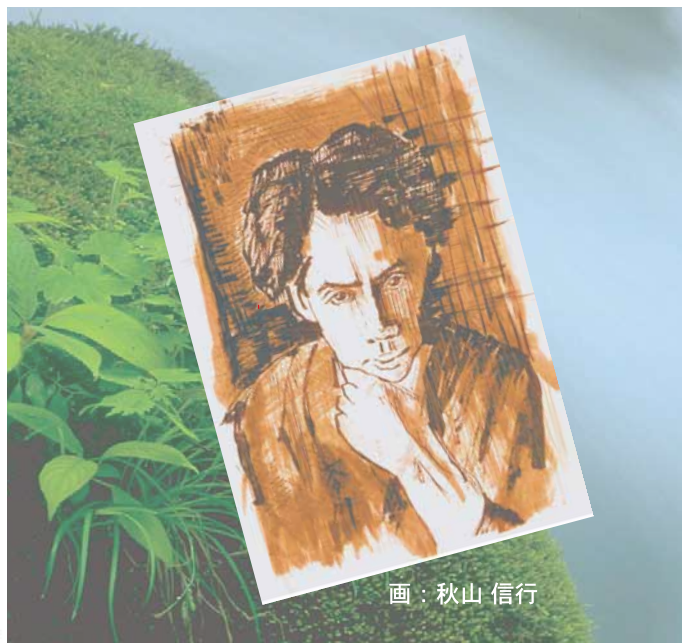
台地を切り拓き武蔵野台を貫いた山手線からの地形景観の眺め。

(神田川、目白が丘、弦巻川、池袋・大塚、谷端川、巣鴨・駒込の台地、谷田川、そして中里の高台へと続く)



北区が田端の高台通りから南一帯を文士村としてPRしだしたのは一体いつだったのだろう。「田端文士村」については近藤富枝氏が詳しく本にまとめている。すなわち文士村自体は明治の終わりに板谷波山が田端に移ってから多くの芸術家、文士が集まりだし芥川龍之介と室生犀星がここに住んだ頃が最盛期である、関東大震災で痛手を受け、太平洋戦争で空襲のため壊滅した。この歴史は都合40年のことだった。

自分は戦後に生まれた。だから自分の歴史と文士村の歴史は



画：秋山 信行

全くかぶっていない。自分が田端高台通りに住んだのは丁度50年前と現在の2回である。50年前にこの地に住んだ印象では、母親が「田端は巢鴨と違ってどこから家に行こうと思っても坂道を登らなければいけない。」と言っていたとおりに学校へ行くにも買い物に出かけるにも坂を下りる必要があって、また帰りに登るといふ面倒をくり返さなければならなかった。東京は坂の都であるから山手線より内側のいわゆる山の手地区であれば坂が多いのは当然なことと思っていた。再度田端に住むようになってもそのように感じていた、最近になってサラリーマンを辞めて自分の住んでいる地区について興味を持つようになり、この坂が川によって作られたものであることに気がつく。

そう言えば谷田橋という所があって、何故道路しか無い場所に橋の名前が付いているのかと不思議に思っていた。ここに谷田川にかかる橋があったのである。谷田川という今は暗渠となっている川が駒込から田端にかけて谷を作っていた。そして飛鳥山、道灌山、上野の山へとつながる台地の真ん中に田端の高台があった。田端の駅の東は低地となっていて、古くから利根川や荒川が土砂を運んだいわゆるデルタ地帯であり、江戸時代には神田や浅草そして吉原と開けていた。しかし根岸まで来ると「喰び住まい」となってしまうていた。

現実には明治の終わりになっても田端の高台一帯は農業地帯であり、近くの千駄木や巢鴨と比べるとただの田舎であった。そう思うのは漱石の小説「三四郎」のなかで、三四郎は上京して直ぐに根津、千駄木、駒込、巢鴨まで散歩している。谷田川(藍染川)のことをそう呼んだらしいがこの川の田端のあたりで三四郎と美禰子は何を話したのだっただろうか。

板谷波山は明治の終わりに田端の高台に移って来た。それは故郷の筑波山がここから臨むことが出来たからだと言う。またそれに続いて多くの芸術家や文士が移り住んだとされ、その理由は上野美術学校に近かったからだった。しかしこの坂ばかり

の不便な台地に文士村と言われる程の多くの文士達が集まったのは都心に近い割に住居費用がここでは安かったという理由が考えられる。現在においても田端は住みやすいところであるが、この坂が発展を阻害しているように思える。

この田端の高台地区は、大戦末空襲にあい灰燼に帰したこれ以後、文士達がここに再度集まることは無かった。波山は今ほど有名ではなかった。だから田端に住んでいた自分は、正岡子規の墓に行くことはあってもその他の事は気にしていなかった。この高台からは芥川や波山の住居跡、子規の墓、二つある八幡神社へも行くことが出来る。しかし50年前には無かった巨大な計画道路は、困ったものだと思わざるを得ない。

八幡坂を下れば田端銀座にでる、その奥には不忍通りの向う昔都電の神明町車庫だった場所に巨大なアパートを見る。そして自分の記憶では近かった、田端銀座と動坂がこんなにも離れていたことに驚き、昔あれ程賑わっていた田端銀座が、さびれていることに心痛む。北区が田端文士村記念館まで造って文士村をPRしているのに、正月休み田端で観光客が一番集まっている所は、谷中七福神の一つとして有名になっている東覚寺ということになってしまった。

自分は 愛染川の流りに添い ゆっくりと散歩する。

(野口 真次)

田端文士村散歩

北区

豊島園が都立公園になるって知っていますか？



フォーラム



粘土模型づくりワークショップ



植物マップ

豊島園のあたりは昔石神井川が蛇行し、川の北側には水田が広がっていました。春には桜、夏には蛍がたくさん飛びかい、川魚釣りの名所でもあったそうです。また谷戸がいくつか見られ、起伏の感じられるところでもありました。川の南側の矢ノ山には豊島氏の練馬城跡があり景勝地だったことから1916年静養地として個人の方が入手し、その後一般に公開されました。1927年には「練馬城址豊島園」として全面開園し、現在も遊園地として多くの人に親しまれています。

2011年12月に東京都は「都市計画・緑地の整備方針」を改訂

し、豊島園及び周辺を防災機能を備えた「練馬城址公園(仮称)」として「重点公園・緑地の優先整備区域」に指定しました。今年3月に東京都へ進捗現況の確認をしたところ、現在は新規事業化区域に区分され、2020年までに国の事業認可を受け、公園整備にかかることでした。

東京都の公表を受け、「どんな公園になるといいか、とりあえずみんなの夢を描いてみたい」と考える人たちが集まり、2012年から活動を始めました。会の名称は「豊島園まち議会」。この場所の地形・歴史・まちや遊園地の歩み、園内のみどりや生き物をしらべ、地域の方や来園者のアンケートも進めています。活動を通じて計画地の特徴をつかみ、多くの方からさまざまな意見や希望をうかがうなかで、都立公園になるとしたら「こんな公園がいいな」という夢をつむいできました。

それを少しかたちにし、さらに多くの方々から意見をもらい、公園計画について一緒に考える材料にしようと2月に粘土模型づくりのワークショップを開きました。

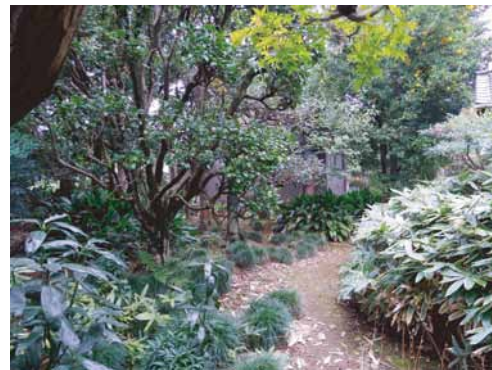
模型の主なポイントは、①地下に遊水池を造り、上を芝生の広場にする。サッカーコートもできそう。②それをゆるやかなスロープにし石神井川におりられるようにする。③掘った土で人工地盤を造り、災害時のヘリポートや資材置き場・トラックの輸送基地などにする。④川沿いなどの豊かなみどりを残し、さらに向山庭園と一体に谷戸の景観を復元する。⑤川の分流を掘って水車を。⑥もし西武豊島線が廃止されるなら、そこを線路公園にして災害時の避難通路や、復旧が本格化したらトラック輸送路に利用する……などでした。これらの「夢」をアンケートの結果とともに、東京都に伝えて行く予定です。(要 久美子)

旧粕谷家住宅見学記 板橋区



板橋区徳丸7丁目にある「旧粕谷家(東の隠居)住宅」を訪れました。旧粕谷家住宅は江戸時代後期に建てられた寄棟造りの茅葺屋根で、現在は板橋区有形文化財に指定されています。普段は外観しか見ることが出来ませんが、訪問した日は特別公開日で内部を開放しボランティアの方より説明を受けながら、さらに裏側の庭まで見学することが出来ました。内部の印象は茅葺屋根の外観イメージとは異なり、天井のある、しっかりとした和室の作りで、優しい断熱性があることを感じました。中央に仏間、神棚を配置した日本の伝統的レイアウトであって、床の間のある奥の間、次の間、控の間、お勝手が襖で仕切られた田の字平面をしています。現地でのボランティアの方の説明によれば江戸時代の原型より数度の改造を行って現在に至っているとのことが見られるとのことで、現代でいうリニューアル、リフォームを経て時代の変化に対応をして来た様子が覗えます。また、普段見る事の出来ない裏側の庭は北側で或るにも拘らず、多種の樹木が生い茂り、数十年前の板橋の自然がそこに有るように感じました。

(信原 利行)



豊島区地形を山手線から再見

豊島区



環状・山手線、豊島区には目白・池袋・大塚・巣鴨・駒込と五駅あり、神田川の谷・学習院下から山手線・唯一の踏切（北区）までの鉄路です。ほとんどのルートが高架となっているこの環状線も豊島区は開削され・掘割というべきか・切通・連なり武蔵野台地をえぐって台地の変化を感じます。

外回り電車から観察する。高田馬場（新宿区）を過ぎて神田川を渡ると豊島区です。学習院下から大学キャンパスに沿い半分切通となった文教地区目白駅に着きます。目白通りをくぐり、副都心・池袋へ向かう。地上の西武池袋線を潜り交差すると地面はさがり、地上レベル池袋駅となる。昭和30年代には池袋に踏切があったので自分の記憶でも地上駅に違いありません。デパートは西武・東武、昔は丸物も三越もありまして大繁華街、山手線は、北に埼京線を分岐し電車線と山手貨物線は東へと方向を変える。この時、住宅街の切通からは、東方向・運転席正面にスカイツリーが見通せる。間もなく大塚駅へ到着。都内唯一の路面電車・都電荒川線ホーム真上であるJR高架ホーム、大塚周辺は谷筋、かつての谷端川（暗渠）のほり三業地アタリを過ぎるとすぐに切通となる。住宅街の掘割は白山通りをくぐり巣鴨駅である。近くに、江戸六地蔵（江戸街道）の一つ眞性寺そして高岩寺こと・とげぬき地蔵と商店街（旧中山道）がある。さらに線路は住宅地掘割を抜け本郷通りをくぐると、坂の途中にある駒込駅です。六義園の最寄り駅、ホーム西は切通ツツジ斜面の土手、東は高架です、ホームを過ぎ元谷田川ガード、すぐに北区中里です。

その踏切を通過し、北区の田端と赤羽駅方面へ貨物山手線（湘南新宿ライン）が上下に交差し右手の田端駅へと向かうのです。このように観ると山手線を腹帯に巻いた豊島区は、ダイナミックに地形を利用しその景観含め区民の肝心な根幹の交通路であります。

（秋山 信行）



発行: JIA城北地域会
公益社団法人 日本建設家協会(JIA)関東甲信越支部
発行日: 2015年9月20日
編集: 吉田 孝
表紙デザイン: 信原 利行
問い合わせホームページ:
<http://www.jia-kanto.org/johoku/index.html>
不許複製・禁無断転載

編集後記

「失ってその大切さに気付くこと」—このコトバに何を思うのだろうか。

大切な人、健康、ペット、時間、筋肉、自動車、バックアップしなかったデータ、学生時代の夏休み、お金……

なぜ、その時に大切にしていなかったのだろうか。たぶん、それは空気のような、当たり前で、特に強く意識をする存在ではなかったからではないか、そして、それを「リスペクト」していなかったからではないか、と思います。

自分たちの「まち」の変容に嘆くより、今の「まち」の素晴らしさを享受したい、そして、できることなら、次の世代に、その素晴らしさを引き渡したいと思います。そのためには、強い意志と努力が必要でしょうが、それを限られた少数の方に委ねてはいけないとも思っています。

今回の特集は、ささやかなことかもしれないけれど、簡単に捨ててはいけないことを皆で持ち寄ってみました。そして、その背景に光を当ててみました。

2011年3月11日に起きた東日本大震災では、エネルギー環境においてもパラダイムシフトを強く意識しました。しかし、今なお多くの方が不自由な生活を送っている中で、既に、節電意識について「世間の節電意識は薄れつつある」と答えた人は77%いるとの調査結果があります。

我々の役割には、継承すべき「素晴らしい」と感じることを表す義務があるとも思っています。

(鈴木 和貴)



撮影:松隈 章

KNIT（ニット）とは北区（Kita）練馬区（Nerima）板橋区（Itabashi）豊島区（Toshima）の城北4区の頭文字で「編む・結ぶ」との意味から、地域の人・歴史・文化が織りなす美しいまちを目指した城北地域会の活動を表しています



Photo by T.Nobuhara